４．「探究する学校」の実践と挑戦

～成果と課題の探究と展望～

高知県立山田高等学校長　　市原　庸寛

１　はじめに

東京一極集中が問題とされて久しいが、高知県においても中核市への人口や資本の集積が見られる。そのため、周辺部の経済や文化が停滞し、地域社会が衰退化している。本校が所在する香美市[1]も例外ではなく、人口は平成18年４月１日に３万人を割り、以降減少の一途をたどり、令和６年２月１日現在では24,976人となっている。その人口構造は、令和５年時点で老年人口の割合が39.7％に対し、年少人口の割合は10.5％となっており、超少子高齢社会となっている。

地域格差の是正や地域の均衡ある発展に向けて、高知県では中山間対策の充実・強化を図っており、中山間の未来を担う人材の育成・確保や、「高知県産業振興計画」に基づいた「産業成長戦略」及び「地域アクションプラン」の取組等を推進している。学校教育活動においても、総合的な探究の時間に地域課題をテーマに探究活動に取り組むケースが増えている。

地域の未来を創造する当事者として、地域が抱える課題に目を向け、地域が持つ価値について考える意義は大きい。さらに、ＶＵＣＡ（Volatility:不確実性、Uncertainty;不安定性、Complexity:複雑性、Ambiguity:曖昧さ）と呼ばれる社会においては、探究する力の育成が必要とされる。

本校[2]は、令和２年度に学科改編を行い、普通科・商業科の２学科体制から、グローバル探究科（その他専門学科）を新設するとともに、商業科をビジネス探究科へと名称を変更し、普通科と併せた３学科体制で教育活動を行っている。併せて、「探究する学校」を標榜し、探究する力の育成を付加価値に据え、学校教育目標の達成に向け邁進している。

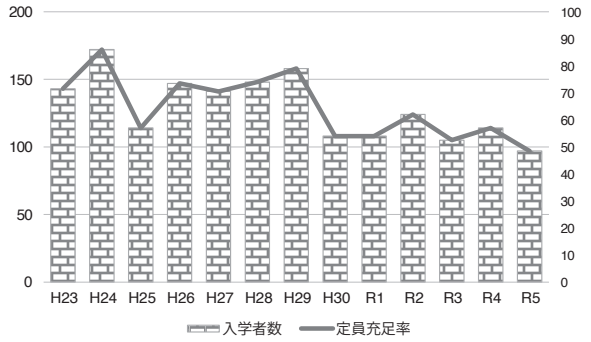
本稿では、「探究する学校」に至った経緯に触れるとともに、令和５年度に取り組んだ施策を中心にその教育効果について述べる。さらには、「探究する学校」の課題と展望についても触れる。

２　学科改編の背景

（１）入学者の減少

本校は、平成４年度以降入学定員を満たしていない状態が続いている。それでも、平成22年度までは定員の80％～ 90％台を維持していた。しかし、平成23年度に70％台に落ち込み、以降、平成24年度を除いて80％を超える入学者を確保できていない。さらに、平成30年度に50％台前半に落ち込み、以降、定員充足率の低迷が続いている（グラフ１）。

グラフ1：入学者数・定員充足率の推移



その背景には、少子化の影響が挙げられるが、同時に地域の風潮として、「電車に乗って高知市の高校に通う」ことへの価値観が強まっている。

高知市に所在する高校への進学志向が一段と高まったのは通学区域の見直しによるものであ

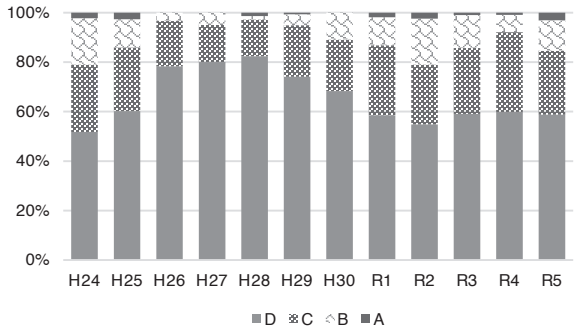
る。高知県では、平成22年度から段階的に通学区域の見直しが行われ、平成24年度入試から通学区域が完全に撤廃された。本校は東部学区に位置していたが、学区制度の撤廃以降、入学者数の減少が顕著である。また、香美市内の中学校からの本校への進学率も、統計によれば26.4％（H28）、35.5％（H29）、24.1％（H30）、18.9％（H31）、30.5％（R2）、28.9％（R3）、31.0%（R4）、26.5%（R5）となっている。

（2）基礎学力の未定着

高知県では、平成24年度から学力サポート事業として学力定着把握検査を１・２年生でそれぞれ２回ずつ実施している[3]。

本校でも基礎力診断テストを活用しており、平成24年度以降の１年生４月時におけるテスト結果（国語・数学・英語の３教科総合）はグラフ２のとおりである。

グラフ2：1年生4月時の基礎力診断テスト結果



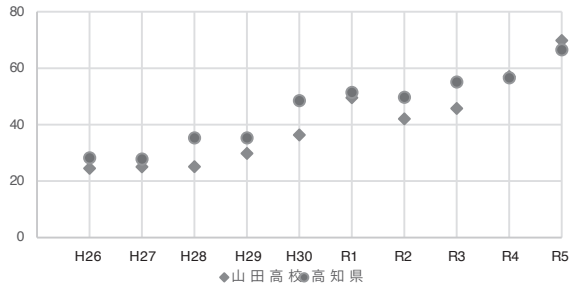
入学者の多くが学習到達ゾーンD層[4]に属しており、中学校までの学習内容の定着に課題が認められる。特に、平成26年度以降、A・B層の割合が３％～11%にとどまっている。

（3）低い自己肯定感

高知県では、平成26年度から「高知県オリジナルアンケート」を実施しており[5]、本校入学生徒の間で低い自己肯定感が指摘されている。グラフ３のとおり、令和３年度入学生まで高知県平均を下回っている。

生活経験の乏しい生徒にとって、自己評価の主要な尺度は学力である。しかし、学力以外の尺度で自己を評価できる機会が乏しいことから、基礎学力の未定着が自己肯定感の低さにつながっていると考えられる。

グラフ3：自分のことが好きである（入学年4月時）



このような状況が、入学希望者の減少と中途退学者や不登校生徒の増加につながっており、学校経営上の課題としては、入学者の増加、基礎学力の定着・向上、そして自己肯定感の向上が求められている。

３　三位一体問題への対策

（1）地域との連携

上述の課題に対処するために、平成26年度から地域との連携を通した取組が開始された。

まず、学校経営上の重要な焦点として、生徒を積極的に地域に関与させ、「地域での教育」及び「地域を活用した活動」を重視した。

具体的には、生徒会が、地元商店街が主催するイベントに企画・運営スタッフとして参加したり、香美市子ども会議のリーダーを務めたりすることで、地域の大人と協力して活動する機会を設定した。

また、平成27年度には生徒会が提案し、「山田家ボランティアーズ」として福祉・教育に特化したボランティア活動を立ち上げた。多くの生徒が小学校の学習支援、子ども食堂のボランティア、特別養護老人ホームでの環境整備などの活動に参加し、地域に認められるようになっていった。

特に、地域からの信頼を得る契機となったのは、平成28年に受諾した地域学校協働本部事業である。このプログラムでは地域連携コーディネーターを配置し、地域との連携強化と協働作

業による地域創生をめざした。その一環として、総合的な学習の時間で行われる「地域課題探究」が実施された。

（２）「地域課題探究」の内容

「地域課題探究」は、地域社会への貢献をめざして、地域の課題を探究的に学ぶことを目的としている。このプログラムでは、「チームでイノベーション」をスローガンに掲げ、生徒がチームで協力して地域の課題に取り組むことをめざしている。

１年次では、地元企業のＣＭ制作や市長への地域活性化案の提案などの活動を行っている[6]。活動の前提として、地元新聞社の記者による取材方法の研修を受けるなど、地域の情報を収集し、地域の課題に関する理解を深めるための取組が行われた。

２年次では、県政課題の探究と知事への提言をテーマに活動が展開され、フィールドワークやヒアリング調査などを通じて解決策を探究している[7]。

また、３年次では、１・２年次の探究活動を基に、個々の進路に関するテーマに取り組んでいる[8]。

これらの活動を通じて、生徒はコミュニケーション能力や地域課題への当事者意識を高めることができた。

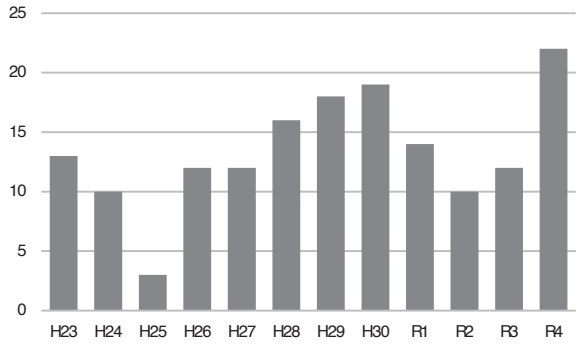
この「地域課題探究」は、平成28年度に策定したプログラムではあるが、現在の学習指導要領下の総合的な探究の時間においても、普通科では「地域課題探究Ⅰ・Ⅱ」と称して教育課程に編成し、ブラッシュアップをしつつもこの学習内容を引き継いでいる。

（３）「地域課題探究」の成果

生徒は地域での活動を通じて、コミュニケーション能力や地域課題に対する当事者意識を向上させた。また、地域活性化に関心を持つ生徒や地域行政に貢献したいと考える生徒が増加している。

国公立大学の合格者数も回復傾向にあり（グラフ４参照）、「地域課題探究」を通じて得られた自信から、生徒はより深く探究を続けることを望むようになっている。

グラフ4：国公立大学合格者数の推移

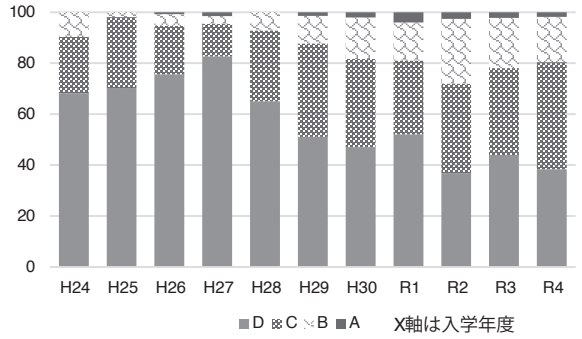


（４）学力向上検討委員会の開催

基礎学力の未定着問題に対処するために、平成29年度から改善に向けた取組が始まった。この取り組みの一環として、学力向上検討委員会を開催し（以下、検討委員会とする。）、議論や検討を通じて基礎学力の定着に向けた施策の周知と徹底が図られた。

この検討委員会は、管理職員、各教科主任、教務主任、進路指導主事で構成され、最初の検討会議では入学時から最終回までの基礎学力の変遷が確認された。（グラフ２・５参照）

グラフ5：基礎力診断テスト結果（最終回）



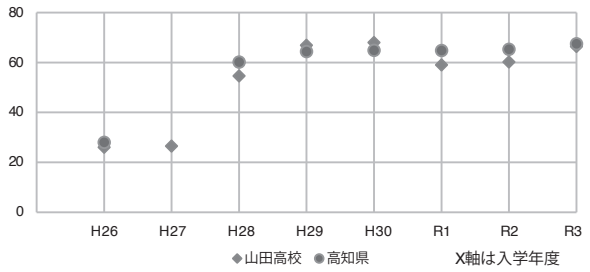
これまで検討委員会でこのようなデータに基づいて議論が行われることはなかったが、データから明らかになったのは、学校の主要任務である学力の定着・向上が達成されていないという現状であり、このような状況が続くと学校の存続に影響を及ぼしかねないことである。また、このテストは教育計画の一環であり、基礎学力

の定着度を確認する重要な指標であることも明らかにされた。そのため、検討委員会ではこれらの事実を共通理解するために７回の会議が平成29年度に、５回の会議が平成30年度に、そして６回の会議が令和元年度にそれぞれ実施された。

議題は、授業改善、評価・評定方法、基礎力診断テストの位置づけと対策、授業外での学習時間の確保、考査の取扱い、進学補習の見直しなど、学力向上対策に関する幅広い議論が行われた。

検討委員会での議論結果は教科会にフィードバックされ、運営委員会や職員会でも共通理解が深まるように周知した。劇的な変化はみられないものの、徐々に基礎学力の定着が認められるようになってきており（グラフ５参照）、これは自己肯定感の向上にもつながっている。「地域課題探究」の効果もあると考えられるが、平成28年度から平成30年度の入学生の自己肯定感の経年変化を見ると、やはり基礎学力との相関が大きいと考えられる。（グラフ６参照）

グラフ6：自分のことが好きである（3年時）



したがって、本校が抱える三位一体問題に有効な対処方法は、カリキュラムマネジメントに他ならない。即座に成果が現れるものではないが、適切なカリキュラムマネジメントを進めることで、数年後には大きな変化が顕在化するだろう。

４　新たな展開

（１）入学者の確保に向けて

平成28年度から始めた「地域課題探究」を通じて、地域の学校としての信頼が徐々に回復してきた。これは、入学者の基礎的な学力の定着度が平成24年度の結果に近づいていることからも示唆される（グラフ２）。わずかな変化であるが、入学生徒の中には基礎学力が定着している生徒が増加している。

しかしながら、グラフ１で示したように、平成30年度及び令和元年度と連続して入学者が定員の50％をかろうじて上回る結果となった。この状況が継続すると、入学者定員の見直しは避けられない。それに伴い、教員定数が減少し、充実した教育活動を担保することが困難になる。学校の縮小を回避するためには、根本的な改革が必要であった。

平成30年12月に高知県高等学校後期再編振興計画が策定された。本校の振興計画として、令和２年度より「グローバル探究科」（その他専門学科）を開設するとともに、現行の商業科を「ビジネス探究科」（商業に関する学科）に改編し、普通科と併せて３学科編成で教育活動を展開することになった。

この計画策定には、香美市が香美学園都市等構想のキーワードに「探究」を掲げており、首長の働き掛けもあった。

令和２年度から、本校は「探究する学校」としての新たな取組みを開始した。めざす人物像は、「既存の発想にとらわれず、チャレンジ精神を持ち、新しい価値を社会に創造することができる人物」である。

（２）グローバル探究科のめざす生徒像と学習内容

グローバル探究科のめざす生徒像は、「答えが容易に見いだせない問いを立て、自己の見解を導き出し、他者を納得させられる表現力を身につけ、卒業後も独自の探究活動ができる生徒」とした。このめざす生徒像の実現をめざすために、主体性と問題解決能力の育成を中心に据えた教育課程が編成された。具体的には、１年次の「探究リテラシー」、２年次の「グローバル課題探究」、そして３年次の「知の探究」が設

けられ、これらを通じてＳＴＥＡＭ教育を意識した学習内容が提供される。

１年次の「探究リテラシー」では、探究の基礎的なスキルを習得し、「①問題設定、情報収集、整理・分析、そしてまとめ・発表という探究のプロセスを習得する。②自身の考えを明確に表現し、他者に理解してもらえるようにする。③興味を持ったテーマについて、深く掘り下げる能力を養う。」を学習目標とする。年間計画には、探究講演、探究運動会。ミニ探究、本探究・発表会（構想段階、途中経過、最終成果）が含まれる。探究講演では、高校時代の探究が高い評価を受けた大学生が招かれ、探究の背景や進め方、教科学習との連携などについて講演し、生徒たちのロールモデルとなる。残りの講演は研究者によるものであり、「探究の意義を理解し、未知の世界への探求心を育む」ことが目的である。

探究運動会[9]では、チームで協力して問題解決に取り組むことで、探究に必要な力を養う機会となる。次に、ミニ探究では、10時間を設け、教員が提示したテーマから選択したグループがリサーチクエスチョンを決定し、探究計画書を作成し、調査や考察を行い、結果をまとめ、スライド作成や発表を行う。そして、本探究では、探究テーマとリサーチクエスチョンを設定し、探究計画書を作成し、活動届を提出し、調査活動や実験を行い、中間発表を行う。その後、中間発表会でのフィードバックを受け、追加実験や修正を行い、最終的な成果物を作成し、最終発表会で発表する[10]。さらに、発表後には、自己評価やフィードバックを行い、次年度の計画を立てる。

２年次の「グローバル課題探究」では、「①自身の探究が現実の生活や世界とどのように関連しているかを意識する。②探究のスキルを磨き、探究活動を深める。」を学習目標とし、個人またはグループで自身の関心や興味に基づいたテーマを設定し、グローバルな視点から問題を捉え、大学や研究機関などの支援を受けながら問題の本質を明らかにしていく。観察や実験、フィールドワーク、アンケート調査などを通じて仮説を検証し、考察を行い、ポスターにまとめて発表する。成果発表の機会は、香美市中央公民館での発表会や地域イベントである「よってたかって生涯学習フォーラム」や「四国高校生探究活動発表会（四国まんなか高校生探究活動サミット）」に積極的に参加し、プレゼンテーション能力を向上させると同時に、評価を受ける機会を広げることがめざされる。

３年次の「知の探究」では、表現能力の向上と自己の変容をメタ認知することが学習目標となっている。一学期では、２年次の探究成果を小論文としてまとめ、英語で要旨を記述し、註釈や参考文献一覧を付けるなど、形式を意識した論文を執筆する。二学期以降は、進路実現をめざした探究テーマを設定し、リサーチ・クエッションや仮説を立て、調査や考察を繰り返し、レポートとしてまとめる。そして、成果物は後輩たちのための知の財産として残される。

（３）ビジネス探究科のめざす生徒像と学習内容

ビジネス探究科のめざす生徒像は、「ビジネスに関心を持ち、企業経営に興味を抱き、将来的には起業家として地域産業の振興に貢献する意志を持つ生徒」とした。

このめざす生徒像を実現するために、起業家として必要な能力やマインドを明らかにし、それらを身に付けるための専門科目を選定し、教育課程に編成した。

具体的には、「課題研究」という科目では、以下のような学習内容が提供される。

①地域の伝統産業や地場産業を世の中に広く知らせる方法について探究する。

②日本や世界のビジネス成功者について分析し、その成功の要因や戦略を探究する。

③「山田まん」が長期間人気商品となった理由を考察し、市場での成功の背景について深く掘り下げる。

④企業へのインタビューシップやインターンシップなどの実践的なプログラムを通じて、実際のビジネス環境での経験を通じて、ビジネスに対する洞察力や考え方を身につける。

このような学習内容を通じて、生徒はビジネスに関する知識や実践的なスキルを身につけ、将来の起業家やビジネスリーダーとしての自己実現に繋げることが期待されている。

（4）普通科のめざす生徒像

普通科のめざす生徒像は、「地域を深く理解し、地域社会が抱える課題を認識・発見し、他者と協力してその課題に取り組み、将来、地域社会の発展に貢献する意志を持つ生徒」とした。

このめざす生徒像を実現するために、毎年「地域課題探究」を改善し続けている。

「探究」を中核に置き、グローバル探究科、ビジネス探究科、普通科の三位一体となって教育活動を展開することで、地域の学校として新たな価値を社会に提供できるのではないか。これに期待し、「探究する学校」の取組が始まったのである。

5　持続可能な「探究する学校」の創造に向けた取組

（1）令和５年度学校経営方針

令和５年度の学校経営方針は以下の通りである。

1）教育方針

高知県教育振興基本計画に基づき、学校の教育活動を通して、高い志を掲げ郷土への愛着と誇りを持つとともに柔軟な国際感覚と社会に貢献する気概と実践力を備えた、知・徳・体の調和の取れた人を育成する。

2）校訓

誠実にあれ　誇らかにあれ　貫きてあれ

3）教育目標

未来を切り拓くことができる、探究心と知識と思いやりに満ちた人物の育成

4）めざす姿

①めざす学校像
- 探究する学校
- 地域から信頼される学校

②めざす生徒像
- 凡事徹底できる生徒
- 知識を大切にしている生徒
- 探究心を持っている生徒
- 思いやりに富んでいる生徒

③めざす教師像
- 高い専門性と指導力を持つ教師
- 柔軟性と創造力を備え、生徒に希望を語れる教師
- 高い使命感と倫理観、豊かな人間性を持つ教師

5）学校経営方針

山高の伝統と校風を受け継ぎながら、組織的な学校運営に努め、生徒の実態や社会の変化を考慮しながら教育活動の計画、実践、評価、改善を行う。そして、生徒が満足し、保護者や地域から信頼される「探究する学校」を築いていく。

（2）「探究する学校」の評価

1）「探究する力」の変容

グローバル探究科では、１・２年生の年度末及び３年生の一学期末に、「探究する力」に関するルーブリックを基に、生徒自身と担当教員による評価を行い、面談を通して評価・評定を行っている。ここでの「探究する力」とは、「①発見する力」「②調べる力」「③考える力」「④解決する力」「⑤表現する力」「⑥探究心」の６つの下位資質・能力に基づいて定義されている。

１期生と２期生のデータを揃えたことで、「探究する力」の形成に関して、年次（1・2期生）と学年（１～３学年）の平均値について二要因分散分析を行った。その結果、年次においては、「③考える力」と「⑤表現する力」の点で有意差（５％水準）が見られ、いずれも１期生の平均値が高かったことが示された。一方、学年においては、すべての資質・能力について有意差

表　「探究する力」を形成する資質・能力の記述統計量及び分散分析結果

資質・能力	1期生						2期生						分散分析			
	1学年（*n*=15）		2学年（*n*=15）		3学年（*n*=15）		1学年（*n*=15）		2学年（*n*=15）		3学年（*n*=15）		年次		学年	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	*F*値	有意確率	*F*値	有意確率
①発見する力	1.80	0.68	2.33	0.90	2.93	0.96	1.13	0.52	2.20	0.56	3.67	0.98	0.02	0.89	40.84	0.00
②調べる力	1.93	0.80	2.40	0.91	3.40	0.91	1.67	0.72	2.27	0.70	3.60	0.83	0.15	0.70	34.02	0.00
③考える力	2.20	0.68	2,93	0.80	3.73	0.59	1.67	0.98	2.13	0.64	3.60	0.51	10.52	0.00	45.48	0.00
④解決する力	2.07	0.96	2.67	0.98	3.33	0.82	1.73	0.59	2.20	0.86	3.57	0.50	1.24	0.27	28.74	0.00
⑤表現する力	1,87	0.83	3.13	1.06	3.67	0.90	1.27	0.80	2.27	0.70	3.93	0.70	5.07	0.03	52.73	0.00
⑥探究心	2,27	0.59	2.60	0.63	3.67	0.90	2.07	0.46	2.40	0.51	4.27	0.70	0.24	0.63	65.40	0.00

が認められた。下位検定の結果、「①発見する力」「②調べる力」「③考える力」「④解決する力」「⑤表現する力」の点において、第３学年、第２学年、第１学年の順に平均値が高かったという結果が得られた。また、「⑥探究心」については、第３学年が第１学年よりも平均値が高かったことが確認された。

これらの結果から、グローバル探究科の探究プログラムが「探究する力」の形成に有効であることが証明された。ただし、「⑥探究心」については、第１学年と第２学年の間に有意差が見られなかったことから、その形成には一定の時間が必要であることが明らかになった。また、「③考える」と「⑤表現する」における年次間の差異は、学年末の成績優秀者割合の違いから理解できることが示唆された（表参照）。

２）生徒の振り返り

定量的な評価に加え、グローバル探究科及び普通科の３年生を対象に、自由記述式による探究活動に対する振り返りを実施した。質問項目は、①探究活動を通じての自身の成長や変化、②探究活動の教科学習への影響、③探究活動で経験したことを卒業後どのように活かすか、④探究の良さを新入生にどのように伝えるか、である。振り返り結果は次のとおりである。

〔グローバル探究科（回答率68.8%）〕

①成長や変化については、積極性や協調性、チャレンジ精神などが挙げられた。また、「発表するときに抵抗感がなくなった」という報告もあった。

②教科学習への影響については、語彙力や文章力の向上、多様な視点の獲得、「意識的に筋道を立てる」能力などが挙げられた。ただし、「実感がない」という回答もあった。

③卒業後の活用については、積極的な行動や努力、目標達成のための考え方の充実などが挙げられた。

④新入生への探究の良さの伝え方については、多様な人との関りや興味関心の探求などが挙げられた。

〔普通科（回答率70.4%）〕

①成長や変化については、積極性と協調性を挙げる生徒が多くいた。また、「納得がいくまで考えることができるようになった」などの回答もあった。

②教科学習への影響については、多くの生徒が実感を持っていたが、一部の生徒は否定的な回答もあった。

③卒業後の活用については、具体的な活用法についての回答が寄せられた。

④新入生への探究の良さの伝え方については、多様な学びや成長、探究の実践性などが挙げられていた。

このように、両学科の生徒は探究活動の意義を理解し、自己の変容についても認識している[11]。

したがって、定性的な評価の観点からも、両学科における探究プログラムは、一定の教育効果が得られるものといえよう。

３）担当教員による振り返り

グローバル探究科及び普通科１～３年生それぞれの探究活動を指導した教員27名を対象に、探究活動に対する振り返りを実施した。

まず、担当したグループや個人の探究は満足できる内容であったかという問いに対して、肯

定回答（「満足できる」、「ほぼ満足できる」）が74.1％（20名）、否定回答（「あまり満足できない」、「満足できない」）が25.9％（7名）であった。否定回答の理由は、生徒に起因するものと教員の指導に関するものに大別される。生徒に起因する理由としては、「全力で取り組めなかった」、「内発的動機が不足していた」、「理解力や継続力が弱かった」、「語彙や発想の引き出しが不足していた」、「全ての過程で教員の示唆や誘導が必要だった」、「課題の設定や仮説立てが甘かった」などが挙げられている。一方、教員の指導に関するものとしては、「どこまで干渉するか判断が難しかった」、「時間的制約により、検証が不十分だった」、「文系的な内容であったことから、テーマに対する深堀ができなかった」などが挙げられている。

次に、生徒が探究活動を通じて得た学びや成果については、主体的に学習に取り組む態度の形成を挙げるものが多く、「自ら探究しようとする姿勢」、「自ら考え行動する力」、「自ら考え抜く力」、「最後まで探究を遂行した」などが挙げられている。その他、「思考力を高める学び」、「課題を発見する力」、「プレゼンテーション能力の向上」、「自分の考えを言語化する能力」といった思考・判断・表現に関するものや、「ＩＣＴの効果的な使用方法を理解する」、「ＩＣＴを活用して調査したり、まとめたりする資料作成のスキル」といった技能に関するものが挙げられている。

その一方で、探究活動を指導するうえで難しかった点については、意欲の低い生徒や「やらされて」活動している生徒に対する動機付け(29.6％)、テーマを深堀するための指導の在り方（25.9％）、そして探究活動に使える時間の不足（14.8％）が挙げられている。

このように、探究活動をするうえでの課題、すなわち生徒の内発的動機を高める、担当教員の指導力を高める、探究活動の時間を確保するなどがあるが、生徒の主体的な学びを促進するうえで有効な活動であると、担当教員の多くは認識している。

（３）「地域から信頼される学校」の創造に向けた取組

１）コンソーシアム会議の開催を通して

令和２年度にグローバル探究科を立ち上げ、「探究する学校」として新たな価値観の提示に努めてきたが、グラフ１のとおり、入学者数及び定員充足率は減少している。特に、グローバル探究科においては、１期生16名（20.0％）、２期生18名（22.5％）、３期生12名（15.0％）、４期生９名（11.3％）と低迷した状態が続いている。

この状況を打開するために、令和５年度になってから、「学校を共創する」をテーマに、香美市教育長、香美市生涯学習振興課推進官、香美市内中学校長、大学関係者、私塾関係者からなるコンソーシアム会議を開催した。令和５年度は２回の開催にとどまったが、この会議から、広報戦術や中学生へのアンケート実施などが議論された。

議論を受けて、広報活動については、パンフレットやポスターの見直しを図るとともに、グローバル探究科に特化したテレビＣＭの制作やＳＮＳを用いた情報発信を行ったり、毎月発刊される香美市広報に取組を掲載したり、オープンスクールの改善・充実を行ったり、中学校３年学年団への周知説明等を実施した。

また、中学３年生を対象にした高校選択に関するアンケートについては、６月と11月に実施し、①グローバル探究科への進学の有無、②進学先として考えている理由、③第一希望校とその理由等を聞くことを通して、ニーズとウオンツを探索し、その後の取り組みをするうえでの基礎資料とした。

２）香美市との連携

香美市は、保育園、幼稚園、小中高校、特別支援学校、そして大学が立地していることから、「香美学園都市構想」を打ち立て、「探究のまち」として人づくりを掲げて推進している。

その一環として、毎年２月に本校を主会場にして「よってたかって生涯学習フォーラム」を開催している。「よってたかって」について、香美市は「みんなで関わり合い、みんなで高め合う」と定義づけている。令和５年度の生涯学習フォーラムでは、中高生や大学生、香美市民から編成された吹奏楽団による演奏を皮切りに、小学生、中学生、高校生、大学生、そして市民が探究の成果を舞台発表する「探究のまちKamiプロジェクトアワード」、小中高生による探究成果をポスター発表する「探究発表ポスターセッション」、市民が講師となる「よってたかって探究講座」、園児や高校生、大学生による舞台発表、そして模擬飲食店の出店など、探究を核にした内容が展開された。

生涯学習フォーラムの参加者は3,600名を超え、実に14.5％の市民が参加している。本校も企画段階から参画しており、フォーラム当日には、３学科の１・２年生がそれぞれの探究成果を発表した。ポスター発表はフロアーで行われ、多くの市民から質問や感想が寄せられ、生徒の対応力を高める有意義な機会となった。

この学習フォーラムは令和５年度で４回目の開催となったが、初めて市民による探究成果発表が行われたり、参加者が倍増したことは画期的である。本校の探究活動が市民に認知されることで、本校が抱える経営課題の解決につながると考えられる。

（4）まとめ

本稿では、「探究する学校」の取組に焦点を当て、学校が地域から信頼される存在としての役割を果たすための取組について検討してきた。まず、「探究する力」の変容についての評価から始め、生徒や教員、地域との連携を通じて、学校の探究プログラムが生徒の成長や地域社会への貢献にどのように影響しているかを明らかにした。

次に、「地域から信頼される学校」の創造に向けた取組について検討した。その中で、コンソーシアム会議や香美市との連携を通じて、地域との協働を強化し、学校の存在価値を高める施策を実施してきた。さらに、生涯学習フォーラムの開催や探究活動の成果発表を通じて、地域社会に貢献する機会を設定してきた。

このように、「探究する学校」の取組は、単なる学校教育の枠を超えて、地域社会との連携を通じてより広い社会貢献を果たす可能性を秘めている。今後も引き続き、地域との協働を強化し、生徒や地域社会の発展に貢献していくことが重要である。

6　おわりに

本校は、令和２年度から「探究する学校」として新たな価値を提示するべく教育活動に邁進してきた。これまで生徒たちが取り組んだテーマは多岐にわたっており、その多様性こそが私たちの社会が直面する課題の複雑さを反映していると思われる。

時代は常に変化し、その波に乗ることが求められる現代社会において、しばしばＶＵＣＡという言葉を耳にする。しかし、この激動の時代は、私たちの先人たちが遭遇したものでもあった。

幕末の日本は、そのような混沌とした時代の一例となる。政治、社会、文化の各面で様々な変革が交錯する時代であり、外圧や国内の諸勢力の対立により、国家の在り方や社会の秩序が根底から揺さぶられた。このような状況下で、「探究」にふさわしい行動を取った人物として坂本龍馬を挙げることができる。

坂本龍馬は、その短い生涯の中で多くの分野において探究心を発揮し、革新的なアイデアを追求した。彼は幕末期の日本の政治情勢や外交関係を探究し、異国の文化や技術にも関心を示した。また、彼の行動や提案は、従来の枠組みにとらわれないものであり、新しい未来を切り開く可能性を模索していた。坂本龍馬の勇敢な姿勢や果敢な行動は、探究心と創造性を象徴するものであり、幕末の激動期において探究の精神を具現化した人物として称賛されている。彼の姿勢や精神は、現代社会においても私たちに大きな示唆を与えている。

本校では、「探究する学校」としてこれからも志を持った探究心あふれる若者の育成に取り組んでいく所存である。

【註】

1　香美市は、高知県北東部に位置し、高知市から車で約30分、ＪＲ特急なら約12～3分と近距離にある。平成10年に物部川流域の旧３町村が合併し香美市となった。この地域は農業が盛んであり、「土佐打ち刃物」や「フラフ」の伝統工芸、日本三大鍾乳洞の「龍河洞」などの観光地もある。また、高知工科大学が平成９年に、高知テクノパークが平成16年に設立され、県内有数の企業が工場を稼働させている。南海トラフ巨大地震の発生の可能性が高まっているため、高知市のベットタウン化が進んでいる。

2　本校は、昭和16年に高知県立山田高等女学校として創立された。その後、昭和23年の学制改革に伴い、高知県立山田高等学校と併設中学校が設置され、昭和24年には、学校再編計画を経て男女共学の新しい高知県立山田高等学校となった。昭和27年には、定時制昼間部を夜間部に切り替えた。昭和37年には商業科が設置され、定時制を併置した普通科、商業科の２学科体制となった。平成４年にアメリカフロリダ州ラーゴ市のラーゴ高校と姉妹校提携を締結し、相互交流を行っている。また、校歌の文末フレーズ「誠実にあれ」、「誇らかにあれ」、「貫きてあれ」を校訓として制定し、創立50周年記念碑を建立した。令和５年に創立82年目を迎え、卒業生は１万５千余人となっている。

　部活動では、女子陸上競技部が強く、全国高等学校女子駅伝競走大会に35回連続で出場している。平成27年度大会では、歴代最高の７位入賞を果たしている。

3　令和２年度までは、この事業の評価対象は３年生第１回テストまでであった。令和３年度以降は、２年生第３回目テストが最終評価となっている。

4　評価の位置づけについては、ベネッセのマナビジョンを参照されたい。

5　「高知県オリジナルアンケート」は、入学年の４月中旬に実施されているが、令和５年度からは６月に実施されるようになった。この変更により、高校生活が回答に影響を与える可能性が推測される。

6　１年次前期では、地元の香美市にある企業のＣＭ制作を行い、後期には市長への地域活性化案の提案を行っている。ＣＭ制作では、元大手広告代理店のクリエイティブディレクターから学び、編集・制作を行っている。地域連携コーディネーターやメンターのサポートのもと、「市長へのまちづくり提言」と題して提言を行っている。両取組とも、市長や地域住民を前にして発表しているが、地域への関心の高まりやコミュニケーション能力の向上、課題解決方法の理解につながっている。

7　「地域課題探究」では、「高知県産業振興計画」を通じて県政課題を理解し、知事や産業振興部長の講話を通じて課題の重要性を実感している。グループで課題を選び、探究活動を行い、フィールドワークやヒアリング調査を実施している。解決策を練り上げるために「アイデアソン」を実施し、根拠を示して論証することの重要性を理解している。また、高知県教育センターで開催される地域課題探究成果発表会での発表を通じて、達成感や自己成長に対する自信を得ている。

8　まず、目的として、将来の進路やキャリアについて深く考えることを掲げている。仮説では、自分の興味や能力、将来のビジョンを基にした進路選択の方向性を立てている。方法としては、自己分析やインタビューなど様々な手法を用いて情報収集を行っている。そして、結果・考察では、自己の進路に関する洞察や気づき、今後の展望についてまとめている。

9　「パスタタワー対決」や「雨どいつないで早押しクイズ対決」など、協働した活動を通して、探究に必要な力を考える機会にしている。これらの活動を通じて、チームワークや問題解決能力、コミュニケーション能力などが育まれている。

10　まとめの活動として、論文、ポスター、スライドの３種類の成果物を作成している。これらの成果物を通じて、自己の探究結果や考察を整理し、他者に伝える能力や表現力が向上している。

11 各項目に対する振り返り回答として、自己の成長や学びについての意識が明確に示されている。それぞれの項目に対する具体の回答を次に示す。

①「身の回りの問題について考えられるようになっ

た」、「うまくいかなかったときに臨機応変に対応する力」、「物事を多角的に捉えられるようになった」、「地域に興味を持てるようになった」

②「多様な視点で考えられる」、「ひとつの問題に対して、じっくり考えられる」、「国語の文章力や数学の論理的思考が高まると思います」、「難しい問題に直面してもあきらめずに問題に取り組めるようになった」

③「多様な視点で物事を考えて、行動したい」、「自信がついたので、自分から行動することを心掛けたい」、「医療関連で、患者さんの気持ちだったり、自分のことだったり、日々振り返って、なぜ失敗したのかを探究し改善できるようになっていったらよいなと思います」、「探究活動で得た人とのつながりや地域についての様々な知見についてこれからの学習に活かしたい」

④「抵抗なく努力の仕方を学び、達成感も得られる」、「発表準備や論文など大変なことも多いけど、終わった後は楽しかったと思える」、「疑問に対し一生懸命考えて、自分なりの答えを導くことが人生に生きてくる」、「普段関わらない年代や立場の方と関われるのは、自分の価値観を広げられてとても有意義」、「探究はこれまでに学習してきた各科目の応用であり、いろんな学習が実践的にでき、かつ自分の好きなことに特化してできる」

山田高校　グローバル探究科　ルーブリック

(1)　次のA～Fの項目について、あなたが現在到達していると考える段階を１から「〇」をつけてください。

(2)　当てはまらないと思う項目については、なにも記入しないでください。

（例）Aの１は到達している→〇を記入、Aの２は到達している→〇を記入、Aの３は到達していない→何も記入しない）

(3)　１年次は２月、２年次は２月、３年次は７月に評価をしてください。

(4)　最終決定の項目には、色鉛筆で〇をしてください。（１年・・・緑　、　２年・・・青　、　３年・・・赤）

		1	2	3	4	5
A	発見する力	自己の生活や周辺の事象について、課題に気づくことができる。	自己の生活や周辺の事象について社会とつながりのある課題を見出し、探究課題として設定することができる。	自己の生活や周辺の事象・世界で起こる事象について自分ごととして捉え、課題を見出すことができる。	自己の生活や周辺の事象・世界で起こる事象についてさまざまな視点から捉え、探究課題を設定することができる。	自己の生活や周りの事象・世界で起こる事象についてさまざまな視点から捉え、社会的意義のある探究課題を設定することができる。
B	解決する力	何らかの根拠を示し、自分の答えを示すことができる。	自分が収集した情報をもとにした根拠を踏まえ、他者と話し合いながら協働して答えを見出すことができる。	自分が収集した情報をもとにした根拠を踏まえ、問いを発展させながら、自分なりの答えを見出すことができる。	先行研究・文献をもとに、科学的根拠を踏まえ、問いを発展させながら、自分なりの答えを見出すことができる。	先行研究・文献をもとに、複数の科学的根拠を踏まえ、問いを発展させながら、自分なりの答えを見出すことができる。
C	考える力	自分で集めた情報をもとに、他者の考えの論理をたどることができる。	自分の考えや、自分の持っている情報を、論理的に整理することができる。	自分の考えや、自分の持っている情報を、論理的に整理し、考察することができる。	自分の考えを、科学的根拠・具体例・他者との比較・先行研究等に照らし合わせて、論理的に整理し、まとめることができる。	根拠に基づいて論理的に説明したもの（されたもの）を、正確かつ批判的に捉え、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。
D	調べる力	インターネットや書籍、フィールドワークなど情報を収集する方法や、データを整理する方法を知っている。	インターネットや書籍、フィールドワークなど、目的に合った情報収集を行い、得た情報を整理することができる。	目的に合った情報を、先行研究・文献等から収集して科学的根拠として示し、それが課題に対して必要な情報かどうかを判断することができる。	目的に合った情報を、先行研究・文献等から収集して科学的根拠として示し、得られた情報やデータから必要な情報を整理したり、正しく読み取ったりすることができる。	目的に合った情報を、先行研究・文献等から収集して科学的根拠として示し、得られた情報やデータを分析して批判的に捉えることができる。
E	表現する力	自分の言葉で表現するために、自分の考えたことをメモすることができる。	自分と他者の意見を明確に区別し、誤解のない表現を選んで考えを述べたり、書いたりすることができる。	自分の意見や考えを伝えるために、相手の立場や考え・意見を理解し、表現方法を選ぶことができる。	自分の意見や考えを伝えるために、相手の立場や考え・意見を理解し、説得力のある表現方法を選び、試みることができる。	自分の意見や考えを正しく伝えるために、相手の立場や考え、場面を意識して説得力のある表現方法を選び、効果的に伝えることができる。
F	探究する心	自分の身の回りの出来事に気づき、興味をもつことができる。	自分の身の回りの出来事について、興味をもったことをもっと知りたいと思うことができる。	自分を取り巻く世界の未知の事象に興味を持ち、それを知っていこうと挑戦することができる。	自分を取り巻く世界の未知の事象に興味を持ち、それを多面的にとらえて他のものと繋げてみたいと思うことができる。	これまでやってきた探究活動を発展させ、生涯にわたって探究学習を続け、未知の事象を解き明かしていきたいと考えることができる。